Nagoya City University

名古屋市立大学　人文社会学部研究紀要　第17号　2004年11月

カント純粋理性批判の解明

Die Erklärung von Kants Kritik der reinen Vernunft

森　哲彦
Tetsuhiko Mori

「我々のあらゆる認識は、一切の可能的経験にある。そしてあらゆる個々のこの可能的経験全体と関係するところに、超越論的真理がある」
（『純粋理性批判』（B185））。

I　序

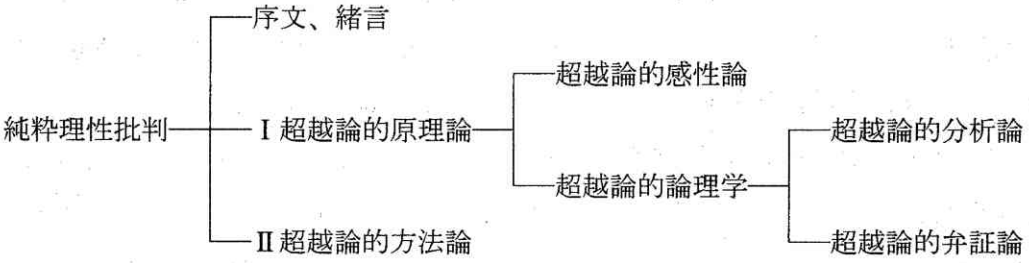
1　世界市民的な意味における哲学の領域は、カント（ I. Kant ）によれば、形而上学、道徳学、宗教論および人間学である。そして根本的には、これらすべては、人間学に数え入れることができる、[1]とする。しかしカント自ら「コペルニクス的転回」と名付けていた認識論上の人間主義[2]は、その後、絶対者を容認するシェリング（ F.W.J. von Schelling ）「同一哲学」（ 1800年 ）[3]やフィヒテ（ J.G. Fichte ）「宗教的世界観」（ 1806年 ）[4]およびヘーゲル（ G.W.F. Hegel ）「絶対的観念論」（ 1812-16年 ）[5]等ドイツ観念論（ 一元論 ）の気運にのみこまれていった。そして19世紀後半、市民革命や産業革命が進展すると、それら革命に対応し得なくなったこれら伝統的ドイツ観念論は、沈滞し、個別科学（ Einzelwissenschaft ）を中心とする時代に移行していった。すなわちこの哲学、思想上の変動において、ロマン主義やニヒリズムを廃し、自然主義や進化論に追従することなく、個別科学の厳密な批判的基礎付けとしての哲学の再構成、復権を目指す運動が起こったのである。そこには、リープマン（ O. Liebmann ）のいう「カントに帰れ（ Züruck zu Kant ）」のスローガンのもと、個別科学に対する哲学的優位を確保せんとする新カント学派（ Neukantianismus ）が、成立する。この学派には、科学一般に対する批判的観念論としての哲学を構想するマールブルク新カント学派[6]と啓蒙主義的な人格観の思想的体系を目指す西南ドイツ新カント学派[7]の世界が出現した。しかしこれら新カント学派の人々は、カント哲学に対して、全体的でなく、カントのなかに部分的観点を持ち込み、自分自身をも売り出そうとしたのである。[8]しかもそのような哲学の世界には「いわば近代化されたプラトン的イデアの世界が見い出される」[9]ものとなった。従ってこのような新カント学派は、実のところヨーロッパでは、第一次大戦後、ダヴォス論争[10]を最後に、失権したのである。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

とはいえ個別科学は、哲学との関連なしには論理的に考えられないところである。それゆえかって新カント学派に基づき、個別科学の基礎付けが行われていた[11]ことも争えない事実である。そこで改めて今日、本来的な個別科学[12]の厳密な批判的基礎付けを確立するには、かかる新カント学派の哲学を解釈し、限定する必要があるにせよ、なによりもまずカントの批判哲学（ kritische Philosophie ）それ自体に立ち帰り、包括的な統一体を認識する必要がある[13]と考えるものである。本年（ 2004 ）は、カント没後200年の記念に当り、カントの批判哲学を文献読解として取り扱う好都合な時期であると思われる。本稿では、客観的理解を行うという意味合いから、まずカントの著作『純粋理性批判』（ 1781年 ）の主旨を追って論述し、解明しておくことを意図するものである。

2　さて『純粋理性批判』に見られるカントの認識論上の基本的考え方は、理性論（ Rationalismus 合理論 ）対経験論（ Empirismus ）、実在論（ Realismus ）対観念論（ Idealismus ）等の認識論上の古典的な対立〔分別〕をいちおう原則的に解消〔調停〕してしまおうとしたもの[14]であり、カント哲学の中心問題を含んでいる。そしてそこでいう分別と調停が「批判」[15]の要諦である。次に『純粋理性批判』の全体像を見ておこう。



カント認識論の全体像理解において、根本的な部分は、序文、緒言、超越論的感性論および超越論的分析論である。特に超越論的感性論では、時間と空間が人間の直観形式であること、超越論的分析論では、12のカテゴリー（ Kategorie ）としての悟性（ Verstand ）の概念形式を条件とすることが、論述される。本稿では、便宜上、簡潔に全体的領域を示すところの序文と緒言を詳しく取り扱うものとする。[16]なお『純粋理性批判』の序文には、1781年第一（A）版と1787年第二（B）版がある。第二版では、様々な改定が行われているので、第一版と第二版の序文を、それぞれ取り上げるものとする。[17]

Ⅱ　『純粋理性批判』第一（A）版序文（ 1781年 ）

1　まずカントは「人間の理性（ Vernunft ）は……特殊の運命を担っている」（AI）ことを告げる。つまり人間の「理性は原則から出発する」ものなので、原則をもって「理性は……条件

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

からそのまた条件へと条件の系列を溯ってますます高く昇っていく」（AI）という本性を有している。かかる学の場が「形而上学（ Metaphysik ）と名付けられている」（AII）ものである。ところでなるほど「かっては形而上学が諸学の女王と称せられた時代があった」（AII）。しかし現代では、理性論と経験論の対立、つまり独断論者と懐疑論者の対立があり「現代の考え方は浅薄である」（AV）ので「現代は、まことに批判の時代であり、一切のものが批判を受けねば」（AV）ならない時代である。[18] しかしカントがここにいう「批判は、形而上学一般の可能もしくは不可能の決定、この学の源泉、範囲および限界の規定という」（AVI）原理に基づくものである。この原理に基づく限りで、カントは「およそ形而上学の課題にして、この批判において解決されないもの、或いはその解決に少なくとも手掛が与えられなかったものは、ただの一つもない」（AVII）と、言明してはばからない。さらにこの課題解決のために「完全」と「周到」が課せられるが、これらは、批判的研究の素材としての認識そのものの本性である。

2　さて「確実（ Gewissheit ）と明晰（ Deutlichkeit ）という二つの特性は認識の形式に関するものであり……本質的要求と見なされてよい」（AIX）のである。そこでまず「確実」ということについて「臆見を立てることはどんなことがあっても許されない……ア・プリオリ（ a priori 先天的 ）に確立されるほどの認識ならば、絶対に必然的と認められることを欲する」（AIX）のである。それゆえア・プリオリを規定することは「かかる確実性の実例にもなる」（AIX）のである。さらにカントによれば、認識批判にとって「超越論的（ transzendental 先験的）感性論」と「純粋悟性概念の演繹」が重要である。次に「明晰」ということでは「第一に概念による論証的（論理的）明晰を……第二に……具体的説明による直観的（感性的）明晰を要求する」（AXII）権利がある、とする。

3　このような批判研究によって、カントが確立しようとする「形而上学は、我々自身が純粋理性（ reine Vernunft ）によって我々に与えられたところの一切の所有物を、体系的に整頓した完全な財産目録（ Inventarium ）にほかならない」（AXIV）のである。それゆえカントがいう現代の正しい形而上学は、客観的認識の成立する一定の原理を確立しなければならない、ということになるのである。

Ⅲ　『純粋理性批判』第二（B）版序文（ 1787年 ）

1　まずカントは「理性の営みに属するところの認識を取扱う仕方が、学としての確実な道を歩んでいるか」（BVII）を問題とする。ところで「論理学（ Logik ）が、かかる確実な道をずっと古い時代から歩んできたことは……明白である」（BVIII）。なぜなら「論理学の限界は、極

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

めて厳密に規定されて」(BIX)ア・プリオリなものであるからである。しかし「新たに知識を獲得するとなると、これは……学と呼ばれて然るべき学に求められねばならない」(BIX)とはいえ「かかる学〔理性〕は……当然……ア・プリオリに認識されるものがなければならない」(BIX)ことになる。ところで「理性認識は、二通りの仕方でそれぞれの対象に関連し得る……第一は、理性による理論的認識(theoretische Erkenntnis)であり、また第二は、理性による実践的認識(praktische Erkenntnis)である。そして両者のいずれについても、その純粋な部分だけが前もって論究せられねばならない……純粋な部分というのは、理性が対象をまったくア・プリオリに規定するような部分」(BX)のことである。

2　さて形而上学は、数学、物理学および自然科学から「まったく孤立した思弁的な理性認識である」(BXIV)。それでは「形而上学において、学としての確実な道....を発見するのは、或は不可能なのではあるまいか」(BXV)と、カントは問題をたてる。そこでカントは「形而上学が数学(Mathematik)および自然科学(Physik)と同じく理性認識であるという事情にかんがみて、この両学と形而上学との類似が許す限り、形而上学において少なくも試みに数学および自然科学を模倣してみたらどうか」(BXVI)とする。そして「我々はこれまで、我々の認識はすべて対象(Gegenstand)に従って規定されねばならぬと考えていた……そこで今度は、対象が我々の認識に従って規定されねばならないというふうに想定したら、形而上学のいろいろな課題がもっとうまく解決されはしないかどうかを、ひとつ試してみてはどうであろう」(BXVI)とする。これがカントのいう認識論上の「コペルニクス(COPERNIKUS)的転回」である。すなわち「形而上学では、ア・プリオリな認識、つまり対象が我々に与えられる前に対象について何ごとかを決定するような認識の可能が要求されている」(BXVI)ものとなる。カントは、この「対象の規定に関して二通りの仕方」(BXVI)を想定する。一つは「対象を規定するに用いる概念(Begriff)は、やはり対象に従っている」、二つは「対象或いは経験がこれらの概念に従って規定される」(BXVII)という想定である。つまり「経験そのものが認識の一つの仕方であり、この認識の仕方は悟性を要求する」(BXVII)ものとなる。

そこで悟性についてみると「悟性の規則は、対象がまだ私に与えられない前に、私が自分自身のうちにこれをア・プリオリに前提していなければならない、そして悟性規則はア・プリオリな悟性概念にとって表現せられるものであるから、経験の一切の対象は、必然的にかかる悟性概念〔12のカテゴリー〕に従って規定せられ、またこれらの概念と一致せねばならない」(BXVII-XVIII)というものである。[19]つまり「我々が物をア・プリオリに認識するのは、我々がこれらの物のなかへ自分で入れるところのものだけである、という新方法(veränderte Methode)」(BXVIII)を吟味するということである。この新しい方法をカントは、実験的方法と呼ぶ。しかし「かかる実験(Experiment)は、我々がア・プリオリに承認しているような概

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

念や原則についてのみ可能」(BXIX)ということである。つまり「同一の対象が、一方では……感性(Sinnlichkeit)および悟性の対象として、また他方では……理性……の対象として……二つの異なる側から考察せられ得るように仕組むのである」(BXIX)。[20]このような試みにより「形而上学は、この第一部門〔超越論的感性論〕でア・プリオリな概念を論究するが、これらの概念に対応しかつ適合する対象は経験に与えられ得る」(BXIX)のである。さらに「形而上学の全目的を論述する……第二部門〔超越論的論理学は〕……可能的経験の限界を超越(über die Grenze der Erfahrung)することこそ、まさに形而上学の最も本質的な関心事」(BXIX)なのである。本書『純粋理性批判』では、このような仕方で「形而上学の希望するままに一切の可能的経験の限界を越えて……ア・プリオリな認識をもってかかる超越論的理性概念に達せしめるような事実(data)が、理性の実践的〔道徳的〕認識に存しないかどうかを検討する」(BXXI)場所を提供するのである。

3　さてこのように「形而上学の従来の方法を改変しようとする試みこそ……この思弁的純粋理性批判の本旨」(BXXII)である。そこで「我々の批判は、客観(Objekt)を二通りの意味に解することを教える、即ち第一には現象(Erscheinung)としての客観であり、また第二には物自体(Ding an sich)としての客観である」(BXXVII)。つまり第一に「我々が認識し得るのは、物自体としての対象ではなくて、感性的直観(sinnliche Anschauung)の対象としての物――換言すれば、現象としての物だけである……〔第二に〕我々はこの同じ対象を……物自体として考えることができねばならないという考えは、依然として保留されている」(BXXVI)のである。カントは、客観を現象と物自体に区分したが、その「同一の意志は、なるほど現象(見える行為)においては自然法則に必然的に従うものとして、その限りにおいては自由でない(nicht die Freiheit)」(BXXVIII)と考えられる。しかし他方で「物自体に属するものとして、自然法則に従うものでないから従ってまた自由である」(BXXVIII)と考えられる、とする。このように物自体は、自然法則に従うものでないので、自由、意志の自由さらに霊魂の不死、神の存在をも想定し、表現することができる、とするのである。

4　このようにして「諸学の領域にはかかる重要な変革がもたらされた、そして思弁的理性(spekulative Vernunft)がこれまで自分のものと思い込んでいた所有物は損失(Verlust)を蒙らざるを得なかった」(BXXXI)のである。この「損失を蒙ったのは、諸学派の主張する独占権(Momopol)であって、決して人類全体の関心(Interesse der Menschen)ではない」(BXXXII)。それゆえ批判によって「唯物論、宿命論、自由思想的無信仰、狂信および迷信……また観念論、懐疑論」(BXXXIV)などすべて根絶せられ、さらに批判が反対するのは「独断論(Dogmatism)」(BXXXV)である。さて第一版序文と同じく、第二版序文でも「命題その

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

ものと命題の証明根拠についても、またこの著述の計画の形式や計画全体が完全であるという点についても、まったく変更の必要を認めなかった」(BXXXVII)。そして純粋理性批判の研究は、結局、この第二版で完成した、とする。次に第二版の諸言は、一から七までの節で構成されている。

Ⅳ　『純粋理性批判』第二版諸言

1　第一節「純粋認識と経験的認識との区別について」では「ア・プリオリな一切の純粋認識」(AIX)と「我々の経験的認識」(BXX)の関係を論述している。カントは「我々の認識がすべて経験をもって(mit der Erfahrung)始まるにしても……我々の認識が必ずしもすべて経験から(aus der Erfahrung)生じる」(B1)のではない。つまり「経験にかかわりのない認識……は、ア・プリオリな認識と呼ばれて、経験的認識から区別せられる」(B2)。そして「ア・プリオリな認識のうちで、経験的なものをいっさい含まない認識を純粋認識」(B3)とする。

2　第二節「我々は或る種のア・プリオリな認識を有する、そして常識で決してこれを欠くものでない」では、カントは「理性を含む……学においてはア・プリオリに認識されるものがなければならない」(BIX)とし「学として確実な道」(BXV)が発見されなければならないことを論述する。そこで「問題は純粋認識と経験的認識とを確実に区別し得る標徴は何か」(B3)とし、それは「ア・プリオリな判断である」(B3)とする。そして「ア・プリオリな認識を表示する確実な特徴」(B4)は「必然性と厳密な普遍性(strenge Allgemeinheit)」(B4)であるとする。そしてその一例を「数学」に求めるとして、第二版序文(BX-XIV)で示されたことを再論する。

3　第三節「哲学は一切のア・プリオリな認識の可能、原理および範囲を規定するような学を必要とする」では、カントが、私がここに言うところの批判は、第一版の序文で「形而上学一般の可能もしくは不可能の決定、この学の源泉、範囲および限界の規定」(AVI)であるとしていたことの論述である。カントによれば「純粋理性にとって避けることのできない課題は神、自由および不死」(B7)である。しかしこの課題を解決する「〔形而上〕学のとる方法は、最初は独断論である」が、それは「理性について予め検討しない」(B7)からである、とする。カントとしては、予め検討するためには「ア・プリオリな……認識はどのような範囲、妥当性および価値をもつのだろうか」(B7)を問う方が自然的である、とする。つまり「我々の理性の仕事の大きな部分」は「様々な概念を分析することに」あり「概念の分析は我々に多くの認識を与える」(B9)のである。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

4　第四節「分析的判断と綜合的判断との区別について」では、カントは、判断について、AはBである、という「関係は、二通りの仕方で可能である」(B10)とする。つまり述語B(Prädikat B)が主語A(Subjekt A)概念に含まれ、Aに属する仕方かまたはBがAの外に属する仕方である。カントは、前者を分析的判断(analytische Urteil)、後者を綜合的判断(synthetische Urteil)と名付ける、つまり判断において、BとAが同一原理によるかまたはBとAが同一原理によらないかである。そして「分析的判断を解明的判断(Erläuterungsurteil)、また綜合的判断を拡張的判断(Erweiterungsurteil)」(B11)と呼ぶ。従って「分析的判断は……ア・プリオリに確立している判断であって、経験的判断ではない」(B12)のである。しかし「経験的判断はその本性上すべて綜合的である」(B11)とし、両者の判断を、分別する。ところが、新しく「ア・プリオリな綜合的判断となると、経験という便宜をまったくもたない」(B12)と指摘する。

5　第五節「理性に基づく一切の理論的な学にはア・プリオリな綜合的判断が原理として含まれている」では、カントは、まず「数学的判断は、すべて綜合的判断である」(B14)とする。例えば「『七に五を加えると十二になる(7＋5＝12)』という命題」(B15)は「分析的命題(analytischer Satz)」と考えられるかも知れない、確かに「七に五を加えられねばならぬということは、なるほどこの両数の和即ち(7＋5)の概念において考えられている、しかしその和が十二に等しいということは、この概念においては考えられていないのである、それだから算術的命題は、綜合的命題(synthetischer Satz)である」(B16)とするのである。同じく「純粋幾何学の原則にしても、分析的なものはなにひとつもない。例えば『直線は二点間で最短である』という命題は、綜合的判断である。直線という概念は……性質を含んでいるだけ〔だが〕……この最短という概念はまったく別に付け加わったものであり……直観が採用されねばならない、綜合はかかる直観によってのみ可能なのである」(B16)とする。次に「自然科学(物理学)はア・プリオリな綜合的判断を原則として自分自身のうちに含んでいる」(B17)とする。さらに形而上学には「当然ア・プリオリな綜合的認識が含まれていなければならない。形而上学の旨とするところは……概念を分析的に解明するのではなく、我々が我々の認識をア・プリオリに拡張する」(B18)ところにある。

6　第六節「純粋理性の一般的課題」では、カントは「純粋理性の本来の課題は『ア・プリオリな綜合的判断はどうして可能であるか』という形の問いに含まれている」(B19)とする。そして純粋哲学は、ア・プリオリな綜合的命題を含んでいるから「純粋数学(reine Mathematik)はどうして可能であるか、純粋自然科学(reine Nationalwissenschaft)はどうして可能である

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

か」(B20)を問うのは当を得ていることである、とする。ところが「形而上学に関しては、この学の従来の発展がはかばかしくなかった」(B21)ので、形而上学については「『人間理性の自然的素質としての形而上学はどうして可能であるか』という問いが生じる……形而上学的な問題は……普遍的な人間理性の自然的な本性から生じる」(B21-22)ということである。従って「理性批判はけっきょく学にならざるを得ない。これに反して批判なしに理性を独断論的に使用すれば、根拠のない主張に迷ってまた必然的に懐疑論に至る」(B22-23)のである。

7　第七節「純粋理性批判という名をもつ或る特殊な学の構想と区分」では、カントは、上述のことから、かかる学を「純粋理性批判の体系のための予備学(Propädentik)」(B25)とする。このようにしてカントは「対象に関する認識ではなくて、むしろ我々が一般に対象を認識する仕方――それがア・プリオリに可能である限り――に関する一切の認識を超越論的と名付ける」(B25)のである。換言すれば、このような理性批判は「恐らくオルガノン(Organon 認識の道具)のための準備」という分別があった、「いつかは純粋理性の哲学の完全な体系が……分析的にもまた綜合的にも示され得るであろう」(B26)とする。つまり純粋理性批判は「超越論的哲学(Transzendental-Philosophie)の完全な構想であるが、しかしまだ超越論的哲学そのものではない〔ので〕……道徳の最高原則(oberster Grundsatz der Moralität)と基本概念とは、ア・プリオリな認識ではあるが、超越論的哲学には属さない」(B28)とするのである。それゆえ「超越論的哲学はまったく思弁的純粋理性の哲学」(B29)となるのである。

つまりこの「諸言」や「序文」において必要なことは「人間の認識には二つの根源がある」(B29)ということである。その二つとは「感性と悟性」である。そして「感性によって我々に対象が与えられ、また悟性によってこの対象が考えられる〔思惟される〕」(B29)ということである。そして「感性は対象が我々に与えられるための条件(Bedingung)をなすところから、超越論的哲学に属する」(B30)ものとなるのである。

V　超越論感性論と超越論的分析論他

カントによれば、人間の認識にとって必要なことは、上述のように「感性と悟性」である。さて『純粋理性批判』で、感性を論述した部分が、超越論的感性論であり、悟性を取り扱った箇所が、超越論的論理学の一部を構成する超越論的分析論である。そこで『純粋理性批判』全体を視野に入れておくため、ここでは超越論的感性論諸言と超越論的論理学一般および超越論的分析論序の内容並びに超越論的弁証論とさらに超越論的方法論の枠組みを提示しておくこととしたい。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

1　超越論的感性論諸言では「認識が直接に対象と関係する方法は……直観(Anschauung)」である(B 33)。従って「我々が対象から触発される仕方によって表象を受け取る能力(Rezeptivität　受容性) を感性」(B 33)とする。ところで「対象は悟性によって考えられる、そして悟性から概念(Begriff)が生じる」(B 33)。しかし思惟は「直観に関係する」ので「我々人間にあってはまず感性に関係する」(B 33)のである。そして「我々が対象から触発される限り対象が表象能力に与える作用によって生じた結果は、感覚である。感覚を介して対象に関係するような直観を経験的直観という」(B 34)である。そして現象には、質料(Materie)と形式(Form)があり「現象の形式は、感覚を受けいれるものとして、すでに我々の心うちにア・プリオリに具わっていなければならない」(B 34)とする。さらに感性の「純粋形式(reine Formen)はそれ自身、純粋直観と呼ばれ」(B 34)、純粋直観はア・プリオリに成立するのである。カントによれば「ア・プリオリな感性の諸原理に関する学を、私は超越論的感性論と名付ける」(B 35)とする。そこから超越論的感性論において「感性の二つの純粋形式であるところの空間と時間(Raum und Zeit)とが、ア・プリオリな認識の原理」(B 36)とされ、空間と時間の概念が論述される。

2　超越論的論理学一般では、すでに第二版序文で、カントが「同一の対象が……感性および悟性の対象として……考察せられ得るように仕組む」(B XIX)としていたように「我々の認識は心意識の二つの源泉から生じる。第一の源泉は、表象を受けとる能力（印象に対する受容性）であり、また第二の源泉は、これらの表象によって対象を認識する能力（〔悟性〕概念の自発性〔 Spontaneität 〕）である」(B 74)。従って「感性がなければ対象は我々に与えられないだろうし、また悟性がなければいかなる対象も思惟されないだろう。内容のない思惟〔直観のない概念〕は空虚だし、また概念のない直観は盲目である」(B 75)。そして「この両者が結合してのみ認識が生じ得る」(B 76)のである。

3　超越論的分析論序で問われるのは「ア・プリオリな全認識を、純粋悟性認識の諸要素に分析する」(B 89)四つの要件である。ここで取り扱われる概念は、1．純粋概念であり、2．思惟と悟性に属し、3．基本的概念であり、4．概念〔カテゴリー〕の表は完全で純粋悟性の全領域を剰すところなく包括する、ことである。このような「完全性は……これらの概念を関連させて一つの体系にすることによってのみ」(B 89)成立し得る。この超越論的分析論では「一つは純粋悟性の概念〔カテゴリー〕を含むものであり〔概念の分析論〕、また他は純粋悟性の原則を含むものである〔原則の分析論〕」(B 90)。前者は、カテゴリーによる悟性能力そのものの分析であり、後者は、カテゴリーを感性の対象に適用する際の規則の解明である。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

4　超越論的弁証論は、全体が純粋理性の誤謬(Paralogismen)に対する論駁であり、内容的には従来の伝統的な思想、すなわち心理学、宇宙論および神学(Psychologie, Kosmologie und Theologie)に対する批判である。まず「心理学」の項は、霊魂論に対する批判の表明である(B 399ff)。「宇宙論」の項は、天体論でなく、世界の基本的構造に関する議論の問題である(B 432ff)。「神学」の項は、神の存在証明(Gottesbeweis)に関する問題である(B 595ff)。

5　超越論的方法論は、超越論的原理論で見られた純粋理性の正しい使用(Gebrauch)の形式を規定するもので、純粋理性の訓練、基準、建築術および歴史により構成されている。「訓練」では、純粋理性の弁証的使用に陥ることを防止する訓練(B 736ff)が、「基準」では、新しい形而上学の形式的基準の構築(B 823ff)が、「建築術」では、体系構築のための技術の吟味(B 860ff)が、さらに「歴史」では、従来の哲学体系の方法論の回顧(B 880ff)が、行われている。

Ⅵ　理性論対経験論、実在論対観念論

『純粋理性批判』の位置付けは、カント批判哲学の最も重要な著作であり、西洋哲学史上においても最重要な作品の一つ、とされている。つまりカント哲学に西洋哲学史が流れ込み、カントから流れ出たような位置を占める、ということである。その実態は、カントの認識論上の考え方が、それまでの理性論と経験論の対立〔分別〕、実在論と観念論の対立の調停を図ろうとしたことにある。そこで『純粋理性批判』の特質を示すこれら二つの分別と調停の問題を論述、解明するものとする。

1　理性論と経験論の分別は、例えば、第二版緒言の第一節で見られた「純粋認識と経験的認識との区別」(B 1)の問題である。すなわち我々の認識は、すべて「経験をもって」始まるが、そうだからといって、すべての認識が「経験から生じる」(B 1)のではないということである。換言すれば、認識の源泉は、理性にもともとそなわっているのか、それとも経験や感覚によってのみ得られるのか、という問題である。このことは認識における「事実問題(quid facti)と権利問題(quid juris)とを区別」(B 116)しなければならない、ことを示している。

まず理性論の側では、認識には、ある種のア・プリオリな認識、生得的観念(idees innees, angeborene Ideen)がある、と考えられている。理性論の古典的代表者であるデカルト(R.Descartes)は、その著作『省察』において、哲学の第一原理を「私はある、私は存在する」[21]とした。デカルトは、この哲学の第一原理を思惟に据えたが、その際、感覚、経験、つまり「「私は存在する」という唯一の経験的主張」(B 274)を否定しているのではなく、むしろ経験も観念に即して明らかにする、というのである。しかしこのようなデカルトの理性論的認

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

識論の立場では、結局のところ、事実問題は、権利問題に還元されてしまうことになるのである。

これに対し、経験論の側では、例えば、「自然科学の大道を発見」（B XII）したベイコン（F.Bacon）は著作『ノヴム・オルガムヌ（新機関）』[22]において、もっぱら経験による真理発見の方法、即ち帰納法を唱え……自然科学の方法論[23]を打ち立てたのである。さらにヒューム（D.Hume）は、認識を経験のみに基づくものと考え、理性に対して完全な不信を表明した。[24]このように「ヒュームは懐疑論に全身をゆだねた」（B 128）ことにより、逆に精密自然科学的認識をも否定するものとなった。従ってこのようなヒュームの経験論的認識論の立場では、権利問題は、事実問題に還元されるものとなる。

そこで理性論と経験論の対立の克服には、理性的な数学による演繹法と経験的な実験による帰納法との結合が必要となる[25]のである。その克服のため、カントの批判的認識論上の基本的考え方は、まず経験論の立場から「斜面における落下運動」（B XII）により「観察と実験による実証的方法」[26]を示したガリレイ（G.Galilei）の著作『新科学対話』[27]と理性論の立場から「宇宙全体を結合している見えざる力」を示したニュートン（I.Newton）の著作『自然哲学の数学的原理』[28]とに示された二つの科学的研究の基本的考え方を哲学の世界に適用したものである。従ってカントのいう認識とは、感覚的素材と理性的形式との結合を果たそうとするものである。そこからカントの認識批判論は「理性論と経験論の原則的統一」[29]を提示するものとなるのである。

2　実在論と観念論の分別は、例えば、第二版序文に見られたように「コペルニクス的転回」の問題[30]である。すなわち我々の認識は、実在論では、すべて「対象に従って」規定されているのか、一方、観念論では、対象の方が「我々の認識に従って」（B XVI）規定されているのか、という問題である。

まず実在論の側では、事物、事象を、それを認識する「主観」の外に、主観から独立して存在するもの、実在的なもの、として捉える立場をいう。つまり事物の感覚的知覚の現実世界そのままの実在感に安住している「常識的に認識する立場」[31]を、「素朴実在論」[31]という。この認識論的立場を取るのが、リード（T.Reid）の常識哲学[32]である。カントによれば「常識は……信じるところのものを、了知し知悉していると思いこむ」（B 501）ものである。それゆえ「常識は理性による問題の解決が絶望であるとなると、決まって用いられる非難所」（B 812）となる。そこから事物が主観から独立して客観的に存在していると見なす実在論が存立する。この実在論に対し、カントは、いわゆる「コペルニクス的転回」を行い「超越論的観念論」（A 369, B 519）を樹立する。この超越論的観念論では、客観は主観（空間、時間）によって構成される単なる表象とされ、主観から独立して存在する「物自体」と厳密に区別される。これ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

に対し「物自体」を客観と見る立場が「超越論的な意味における実在論」(B519)なのである。

これに対し、観念論の側では、認識意識を離れては外に何も実在しない、とする立場がある。このような観念論の古典的代表者として、バークリ(G.Berkeley)の著作『人知原理論』がある。バークリによれば「事物の存在するとは知覚させることである(Sein(esse)solcher Dinge ist Perzipiertwerden(percipi))」[33]とし、従って「物体が私によって現実に知覚されないとき……これら物体は全く存在しない」[34]のである。しかしこの観念論では、認識主体の外部の世界の存在を疑う哲学的立場を意味するものとなる。この一元論的観念論に対し、カントは、本来「空間は物を成立せしめる条件として物から分離せられ得ないものであるが、彼（バークリ）はかかる空間と一切の物とをそれ自体不可能な何か或るものであり、それ故に空間における一切のものを単なる想像上の虚構物にすぎないと言う」(B274)とするのである。カントによれば、この「独断的観念論」(B274)の不健全な立場を克服する認識論が、超越論的観念論なのである。

そこで実在論と観念論との調停には、まず観念によって外的対象を知覚する「素朴実在論」と外的対象の現実的存在を虚妄とする「独断的観念論」をそれぞれ超越論的観念論で克服する、というものである。つまり物自体の認識を否定する超越論的観念論の立場に立ってこそ、経験的には感覚的現実を肯定する経験的実在論の裏づけもできる、[35]というものである。すなわちカントは、現象を実在と見ているのである。このようにしてカントは、自らの立場を称し「超越論的観念論者は、経験的実在論者でありうる」(A370)とし、従って「いわゆる二元論者(Dualist)でありうる」(A370)として、その認識の在り方を位置付けている。

Ⅶ　結

カントの認識論上の立場は、批判主義と呼ばれている。カントにとって批判は、まず分別、対立が前提であり、調停、統一をヘーゲルのように「同一性(Identitat)」の存在を出発点としている訳ではない。カントの認識論は、あくまで二元論である。この二元論の立場こそが『純粋理性批判』を特徴づけている。この二元論問題は、感性と悟性の関係付けをも規定しているのである。

カントによれば、感性と悟性の「両つの能力或は特有な力は、各自の機能を互に交換することはできない」(B75)。しかし「この両者が結合してのみ、認識が生じ得る」(B76)のである。ではこの認識を生じせしめる「結合」とは何か。カントは結合と認識の関係について「多様なものをまず或る仕方で通観し……これを結合して、この多様なものの認識を構成しようとする。かかる思惟作用を、私は総合と名づける」(B102)とする。そしてそのような「総合はこの多様なものが経験的ではなく、ア・プリオリに与えられている」(B103)のである。しかも総合は「構想

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

力(Einbildungskraft)の作用にほかならない……この構想力がないと、我々はまったく認識をもち得ない」(B104)のである。このようにカントの思考は、感性と悟性の総合は、一元論に向かうのではなく「無意識的」(B104)な構想力[36]へと展開されるものとなるのである。そしてカントは、二元論を肯定し、理性論対経験論、実在論対観念論の総合を受け入れるのである。

本稿の目標は、カント『純粋理性批判』(第一批判)の意味付けを客観的に理解するため、まず著書の根本的な部分と全体的領域を解明することであった。また筆者の意図は、個別科学の厳密な批判的基礎づけを確立するために、カントの純粋理性批判哲学の統一体を認識することであった。しかし本稿は、用いる資料をすべて検討したものでなく、新しい資料を開拓したものではない。本稿に関わって、カントの学としての形而上学を総合的に理解するには、自然の形而上学である『純粋理性批判』に次いで、さらに道徳の形而上学としての『実践理性批判』(第二批判)[37]の解明が必要である。当面の課題は、カントの『実践理性批判』の客観的理解を行う作業である。[38]

(未完)

注)

1) Kant, Immanuel: *Lojik*, 1800. in: *Kants Werke*, Hrsg. von Ernst Cassierer, Bd.9, Berlin 1923.S.343-344. 門脇卓爾訳「論理学・緒論」『カント全集』第12巻所収、理想社、1975年、377ページ。湯浅正彦・井上義彦訳「論理学」『カント全集」第17巻所収、岩波書店、2001年、35ページ。

カントが、批判哲学を結局のところ人間学とするということは、カント哲学が、理性の限界を語ることを、最も必要なことであるとすると共に、総じて人間の学であることを示している。つまりカントの哲学的関心が「1. 私はなにを知りうるか。2. 私はなにを為すべきか。3. 私はなにを望むことが許されているか」という三つの問いは、結局のところ「4. 人間とはなにか」の最後の問いに関係するように、カント哲学は、人間学(Antropologie)であることになるのである。(Kant, I.: Ebd., S.343-344. 門脇卓爾、前掲訳、376-377ページ。湯浅正彦・井上義彦、前掲訳、34-35ページ。)

なおここで指摘したカントの人間学は、超越論的人間学に属するものである。これに対し、カントは実用的人間学を展開している。すなわち実用的人間学とは「人間が自由に行為する存在者として、自分自身をどのようなものにしようとし〔実用実践〕、あるいは為すことができ、また為すべきであるか〔道徳〕、の研究に向う」※ことである。ここで実用的ということは、実践的なものに属する内容である。※(Kant, I.: *Anthoropologie in pragmatischer Hinsicht*, 1798. in: *Kants Werke*, Hrsg.von E.Cassierer, Bd.8, Berlin 1923.S.3. (C版)。und Kant, I.: *Anthoropologie in pragmatischer Hinsicht*, 1798. in: *Philosophie Bibliothek*, Bd.44, Hrsg.von Karl Vorländer, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1980. S.3. (B版)。山下太郎訳「人間学」『カント全集』第14巻所収、理想社、1966年、21ページ。渋谷治美訳「実用的見地における人間学」『カント全集』第15巻所収、岩波書店、2003年、11ページ。)

2) 大江精三『一般論理学　科学的形而上学への道』南窓社、1973年、12ページ。

3) Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph von: *System des transzendentalen Idealismus*, 1800. in: *Philosophische Bibliothek*, Bd.254, Hrsg. von Ruth-Eva Schulz, Felix Meiner, Hamburg 1957. unveränderter Nachdurch 1962. 赤松元通訳『先験的観念論の体系』蒼樹社、1948年。

4) Fichte, Johann Gottlieb: *Die Anweisung zum seligen Leben, oder auch die Religionslehre*, Jena und Leipzig, Gabler

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

1806. in: *Fichtes Werke*, Hrsg. von Immanuel Hermann Fichte, Bd.3, Berlin 1965. 高橋亘訳『浄福なる生への指標』岩波文庫、岩波書店、1938年。

5）Hegel, Georg Wilhelm Friedrich: *Wissenschaft der Lojik*, Bd.1, die objektive Logik, 1812/1813. in: *Gesammelte Werke*, Bd.11, Hrsg. von Friedrich Hogemann und Walter Jaeschke, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1978.

Hegel, G.W.F.: *Wissenschaft der Lojik*, Bd.2, die subjektive Lojik, 1816. in: *Gesammelte Werke*, Bd.12, Hrsg. von Friedrich Hogemann und Walter Jaeschke, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1981. 寺沢恒信訳『大論理学』1. 2. 3巻、以文社、1977, 83, 99年。

6）マールブルク新カント学派で、カント批判哲学を独自の立場から理解、解明した研究として、例えば、次のような文献が挙げられる。

Cohen, Hermann: *Lojik der reinen Erkenntnis*, 1871. in: *Cohen Werke*, Hrsg. von Hermann-Cohen-Archiv, Bd.1, Georg Olms Verlag, Hildesheim, New York 1977. 村上寛逸譯『純粋認識の論理学』ヘルマン・コーエン哲學の體系第一巻、第一書房、1932年。

Cassirer, Ernst: *Kants Leben und Lehre*, verlegt bei Bruno Cassirer, Berlin 1918.2.Aufl.1921. 門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、(1986年)2003年。

Cassirer, E.: *Philosophie der symbolischen Formen*, 1 Teil, *Die Sprache*, Berlin 1923.2 Teil, *Das mythische Denken*, Berlin 1925.3 Teil, *Phänomenologie der Erkenntnis*, Berlin 1929. 生松敬三・木田元訳『シンボル形式の哲学』（一）岩波文庫、岩波書店、1989年。木田元訳『シンボル形式の哲学』（二）1991年。木田元・村岡晋一訳『シンボル形式の哲学』（三）1994年。木田元訳『シンボル形式の哲学』（四）1997年。

7）西南ドイツ新カント学派で、カント批判哲学を独自の立場から理解、解明した研究として、例えば、次のような文献が挙げられる。

Windelband, Wilhelm: *Einleitung in die Philosophie*. in: *Grundriss der philosophischen Wissenschaften*, Hrsg. von Fritz Medicus, Tübingen 1914,2.Aufl.1920. 速水敬二・高桑純夫・山本光雄訳『哲学概論』1. 2巻、岩波文庫、岩波書店、1964年。

Rickert, Heinrich: *Der Gegenstand der Erkenntnis*, Einführung in die Transzendental-Philosophie, Verlag Mohr, Tübingen 1892.3.Aufl.1915. 山内得立訳『認識の対象』岩波文庫、岩波書店、(1927年)1988年。

Rickert, H.: *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, Verlag Mohr,Tübingen 1899.2.Aufl.1910. 佐竹哲雄・豊川昇訳『文化科学と自然科学』岩波文庫、岩波書店、(1939年)1967年。

Bauch, Bruno: *Immanuel Kant*, in Geschichte der Philosophie, dargestellt von Bruno Bauch, Bd.7, Berlin und Leipzig 1911,3.Aufl.1923. 小倉貞秀監訳『イマヌエル・カント　人とその思想』以文社、1988年。

8）Adickes, Erich: *Kant und das Ding an sich*, Pan Verlag Rolf Heise, Berlin 1924.S.1. 赤松常弘訳・エーリッヒ、アディッケス『カントと物自体』法政大学出版局、1976年、2ページ。

9）大江精三、前掲書、16ページ。

10）このダヴォス論争は、1929年スイスの保養地ダヴォスでカッシーラー（ E.Cassirer ）とハイデガー（ M.Heidegger ）との間で、カント哲学の評価をめぐって行われた。それは当時、最大の哲学的討論として世界的に注目されたものである。カッシーラーは、1929年に認識論『シンボル形式の哲学』全３部（本稿、注6)の Cassirer,E. を参照）を出版、一方、ハイデガーは、1927年に著作『存在と時間』を著して存在論の旗手として登場していた。この論争を最後に、新カント学派は、実質的に失権したのである。岩尾龍太郎訳「ダヴォスにおいてＥ、カッシーラーとＭ、ハイデガーの間に交された討論」西南学院大学『文理論集』第25観第2号所収、1985年2月参照。岩尾龍太郎訳『ダヴォス討論（カッシーラー対ハイデガー）みすず書房、2001年。

11）新カント学派の哲学を社会科学の領域に適用し、厳密な個別科学の形成を行った研究として、例えば、各分野で次のような文献が挙げられる。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

私経済学（後の経営経済学）の分野、Lindwurm, Arnold: *Grundzüge der Staats- und Privatwirtschaftslehre*, Braunschweig 1866. und Weyermann, Moritz Rudolf / Schönitz, Hans: *Grundlagen und Systematik einer wissenschaftlihen Privatwirtschatslehre und Pflege an Universitäten und Fach-Hochschulen*, Karlsruhe 1912.

国民経済学の分野、Menger, Carl: *Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der poitischen Ökonomie insbesondere*, Leipzig 1883. 福井孝治・吉田昇三訳『社会科学の方法に関する研究』岩波文庫、岩波書店、(1939年)1988年。und Wieser, Friedrich von: *Über den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Wertes*, 1884.

政治学の分野、Bernstein, Eduard: *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgabe der Sozialdemokratie*, Stuttgart(Dietz) 1899.1920. 佐瀬昌盛訳『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』ダイヤモンド社、1974年。

法学の分野、Stammler, Rudolf: "Über die Methode der geschichtlichen Rechtstheorie", *Festgabe Bernhard Windscheids fünfzigjährigen Doktorjubiläum am 22. Dezember, 1888*, Halle a.S.1889. jezt in: *Rechtsphilosophische Abhandlungen und Vorträge*, Bd.1, Berlin 1925. und Lask, Emil: *Rechtsphilosophie*, 1905. 田中耕太郎訳『法律哲学』田中耕太郎法律哲学論集（二）岩波書店、1945年。

社会学の分野、Weber, Max: Die *"Objektivität" sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis*, 1904. in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre von Max Weber*, 1922. 富永健一・立野保夫訳・折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫、岩波書店、1989年。und Simmel, Georg: *Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaften*, Dunker & Hunblot, Leipzig 1908. 居安正訳『社会学』上・下、白水社、1994年。

12）筆者が専攻する個別科学は、ドイツ経営経済学である。ドイツ経営経済学という標題をもつ邦文著書として、例えば、次のような文献が挙げられる。

小島三郎『ドイツ経験主義経営経済学の研究』有斐閣、1965年。

小島三郎『戦後ドイツ経営経済学の展開』慶應通信、1968年。

古林喜楽『ドイツ経営経済学』千倉書房、1980年。

中村常次郎『ドイツ経営経済学』森山書店、1982年。

吉田和夫『ドイツ経営経済学』森山書店、1982年。

森哲彦『ドイツ経営経済学』千倉書房、2003年。

13）カント『純粋理性批判』を特定の立場からではなく、客観的に理解、解明した研究として、例えば、次のような文献が挙げられる。

Smith, Normann Kenp: *A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason"* 1.Ed.1918.2.Ed. revised an enlarged, The Macmillan Press Ltd. 1923. 山本冬樹訳『カント『純粋理性批判』註解』上下、行路社、2001年。

Adiches, E.: a.a.O.

Kaulbach, Friedrich: *Philosophie als Wissenschaft*, Eine Anteilung zum Studium von Kants Kritik der reinen Vernunft in Vorlesungen, Gerstenberg Verlag, Hildesheim 1981. 井上昌計訳・F．カウルバッハ『純粋理性批判案内－学としての哲学－』成文堂、1984年。

桑木厳翼『カントと現代の哲学』岩波書店、(1917年)1948年。

高坂正顕『カント』西洋哲学叢書、1939年、『高坂正顕著作集』第二巻所収、理想社、1954年

高峯一愚『純粋理性批判入門』論創社、1979年。

黒崎政男『カント『純粋理性批判』入門』講談社選書メチエ192、講談社、2000年。

14）大江精三、前掲書、85ページ。

15）批判の語源は、ギリシア語のkrinō「分ける」ことである。そこから批判は、諸要素の分割〔分別〕と連関〔調停〕を明らかにするもの、となる。カントのいう批判も分別と調停をもってその本領とする。すな

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

わちカントのいうところの「批判」は「書物や体系の批判ではなく、理性が一切の経験にかかわりなく達得しようとするあらゆる認識に関して理性能力一般を批判する」（AVI）ことである。このカントの批判は、従って否定や拒否のうちにではなく、ポパー（ K.R. Popper ）のいう認識進歩のうちに、その後継者を見い出すものとなる。

16）カント『純粋理性批判』の原典は、次のものを使用した。なお本文各段落の冒頭に振った番号は、筆者が便宜上付けたものである。

Kant, Immanuel: *Kritik der reinen Vernunft*. 1781. in: *Kants Werke*, Hrsg.von Ernst Cassierer, Bd.3, Berlin 1922.

Kant.I.: *Kritik der reinen Vernunft*. 1.Aufl.1781.2.Aufl.1787. in: *Philosophie Bibliothek*, Bd.37a, Hrsg.von Raymund Schmidt, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1956.

翻訳は、岩波文庫版、篠原英雄訳『純粋理性批判』上中下巻、岩波書店、1961, 62年に拠った。

17）『純粋理性批判』引用箇所の表示は、第一版は、例えば(AI)、第二版は、例えば(BVII)のように記するものとする。

18）批判の時代にあって、カントは、形而上学の進歩について、人間認識の「独断論」を少年期、「懐疑論」を〔青年期〕、「批判論　を成年期にいれている（B789)。そして分別と調停の批判精神から見れば、「批判論」は、「理性論」と「経験論」の中央頂点に位置するものとなる。

19）悟性概念〔12のカテゴリー〕表の四綱目について。「分量のカテゴリーは単一性、数多性、総体性の三のカテゴリーを、性質のカテゴリーは実在性、否定性、制限性の三のカテゴリーを、関係のカテゴリーは付属性と自存性、原因性と依存性、相互性（相互関係）の三のカテゴリーを、様態のカテゴリーは可能―不可能、現実的存在―非存在、必然性―偶然性の三のカテゴリーを含んでいる。悟性はみずらかのうちにこれらの概念をア・プリオリに含んでいる」（B106）のである。

20）カントのいう感性、悟性、理性は、換言すれば次のようである。感性は受容的な下級認識能力を、悟性は自発的な「高級認識能力」を（B169)、理性は統一的な「最高の認識能力」（B385）を、意味する。そして「我々の認識は感性から悟性へと進みついに理性に終わる」（B355）ものとなる。

21）Descartes. René: *Medtationes de prima philosophia*, 1641. Oeuvres de Descartes, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Paris 1965-1975. 井上庄七・森啓訳「省察」デカルト『省察　情念論』所収、中公クラシックスW21、中央公論新社、2002年、35ページ。

デカルトは、『省察』に先立ち『方法序説』においても「私は考える、ゆえに私は存在する（ Cogito, ergo sum ）」を哲学の第一原理としている。Descartes, R.: *Discours de la méthode, Essais*, 1637. Préface et commentaires par Marcel Barjonet. (Classiques du peuple). Paris, Editions Sociales, 1950. 谷川多佳子訳『方法序説』岩波文庫、岩波書店、1997年、第四部、46ページ。

22）Bacon, Francis: *Novum Organum*, 1620. edited by Thomas Fowler, 2nd ed., Oxford 1889. 桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム（新機関)』岩波文庫、岩波書店、1978年。

23）大江精三、前掲書、88-89ページ。

24）Hume, David: *A Treatise of Human Nature*, 1739-40. Reprinted from the original edition. Edited by L.A.Selby-Bigge. Oxford. Clarendon Press, 1888. second edition 1896. 大槻春彦訳『人性論』4巻、岩波文庫、岩波書店、1948-52年。

25）大江精三、前掲書、89ページ。

26）Galilei, Galileo: *Discorsi e dimostrazioni matematiche introno a due nuove scienze attementi alla mecanicu & i movimenti locali*, In Leida, Appresso gli Elsevirii, 1638. 今野武雄・日田節次訳『新科学対話』2巻、岩波文庫、岩波書店、1967年。

27）坂本百大「科学哲学とは何か」坂本百大・野家啓一編著『科学哲学―現代哲学の転回』所収第1章、北樹出版、2002年、21-22ページ。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

28) Newton, Sir Isaac: *Philosophiae nationalis principia mathematica*, 1687. Vol. I ~II, The 3 dedition(1726)with variant readings.Assembled and edited by Alexandre Koyre and I.Bernard Cohen, with the assistance of Anne Whitmann, Cambrige, University Press, 1972. 中野猿人訳『プリンシピア　自然哲学の数学的原理』講談社、1977年。

29) 大江精三、前掲書、90ページ。

30) Copernicus, Niclaus: *De revolutionibus orbium coelestium*, Libri VI, Normbergae apud Ioh. Petreium, 1543. Hacisimile-reprint by Culture et Civilisation, Bruxelles, 1966.

31) 大江精三、前掲書、92ページ。

32) Reid, Thomas:*An Inquiry into the Human Mind on the Principles of Common Sense*, Edinburgh, Printed for A.Miller and A.Kincaid & J.Bell, 1764.

リードによれば「近代哲学の誤謬は、認識の直接的対象が精神の中の観念」にある。この観念は「バークリのエゴイズム（独我論）やヒュームの懐疑論のような非合理な立場に帰着する」。この立場に対し、リードは「哲学は常識を基礎にすべしと要求する。これは哲学認識の誇張癖や形而上学の夢遊病を修正するのに役立った。常識は物の存在を最初から確信している」。（磯江景攷「リード」『岩波哲学・思想事典』岩波書店、(1998年)2003年、16831ページ)。リードの研究については、例えば、次のような邦文献が挙げられる。長尾伸一『トマス・リード』名古屋大学出版会、2004年。

33) Berkeley, George: *A Treatise concerning the Principles of Humann Knowledge*, 1710, 2ed 1734. in: Berkeley. Philosophical Writings, selected and edited by T.E. Jessop, Nelson 1952. p.50.

Berkeley, G.: *Eine Abhandlung über die Prinzipien der menschlichen Erkenntnis*, 1869. in: Philosophie Bibliothek, Bd.20, von Alfred Klemmt, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1979. S.26. 大槻春彦訳『人知原理論』岩波文庫、岩波書店、1958年、第１部第３節、45ページ。

34) *Ibid*., p.52. Ebd.,S.28. 大槻春彦、前掲訳、第１部第６節、47ページ。

35) 大江精三、前掲書、94ページ。

36) 構想力についてのカント理解には、ハイデガーの特異な解釈が挙げられる。

Heidegger, Martin: *Kant und das Problem der Metaphisik*, Todtnauberg 1929. 3Bd.,1965. 木場深定訳『カントと形而上学の問題』〔ハイデッガー選集19〕理想社、1976年。

ハイデガーは、彼の著作第２章で、カント『純粋理性批判』の構想力を存在論的総合において中心的な役割を果たすものとする。しかしこのハイデガーの存在論的解釈は、カントの認識論的立場からの逸脱を示すものとなっている。

37) Kant,I.: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788. in: *Kants Werke*, Hrsg.von E. Cassierer, Bd.5, Berlin 1922.（C版)。

Kant, I.: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788. in: *Philosophie Bibliothek*, Bd.3 8, Hrsg.von Karl Vorländer, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1958.（B版)。深作守文訳「実践理性批判」『カント全集』第七巻所収、理想社、(1965年)1974年。波多野精一・宮本和吉・篠田英雄訳、カント『実践理性批判』岩波文庫、岩波書店、(1979年)2003年。

38) 以下では『実践理性批判』第二批判の趣旨を、簡潔に示しておくものとする。

まず『純粋理性批判』第一批判が、理論理性の認識能力の批判をおこなったのに対し、第二批判は、実践理性の認識能力の批判を課題としている。すなわち第一批判が「形而上学の可能もしくは不可能の決定、この学の源泉、範囲および限界の規定」（AVI)をおこなったのに対し、第二批判は「実践理性(praktische Vernunft)を可能ならしめる諸原理およびこの理性の範囲と限界とを規定する」（B9, C9)ものである。第二批判では、理論理性に対して、実践理性の優位あるいは実践理性の要請が展開される。人間は、経験的性格によれば、不自由であるが、叡智的性格によれば、自由である。すなわち実践理性においては、人間は自由であり、意志は自律である。この自由の因果性によって道徳的法則が求められ「純粋実践理性の根

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

本法則」が打ち立てられる。その法則は「汝の意志の格率(Maxime deines Willes)が、つねに同時に普遍的立法の原理と見なされるように行為せよ」(B36, C35)という、定言的命法(kategorischer Imperativ)である。そのため、第一批判には見られなかった、霊魂の不滅、神の存在が、要請されるものとなる。

参考引用文献

Adickes, Erich: *Kant und das Ding an sich*, Pan Verlag Rolf Heise, Berlin 1924. 赤松常弘訳・エーリッヒ、アディッケス『カントと物自体』法政大学出版局、1976年。

有福孝岳『カントの超越論的主体性の哲学』理想社、1990年。

有福孝岳・坂部恵編『カント事典』弘文堂、1997年。

Bacon, Francis: *Novum Organum*, 1620. edited by Thomas Fowler, 2nd ed., Oxford 1889. 桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム（新機関)』岩波文庫、岩波書店、1978年。

Bauch, Bruno: *Immanuel Kant*, in Geschichte der Philosophie, dargestellt von Bruno Bauch, Bd.7, Berlin und Leipzig 1911, 3.Aufl.1923. 小倉貞秀監訳『イマヌエル・カント　人とその思想』以文社、1988年。

Berkeley, George: *A Treatise concerning the Principles of Humann Knowledge*, 1710, 2ed 1734. in: Berkeley. Philosophical Writings, selected and edited by T.E. Jessop, Nelson 1952.

Berkeley, G.: *Eine Abhandlung über die Prinzipien der menschlichen Erkenntnis*, 1869. in: Philosophie Bibliothek, Bd.20, von Alfred Klemmt, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1979. 大槻春彦訳『人知原理論』岩波文庫、岩波書店、1958年。

Bernstein, Eduard: *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgabe der Sozialdemokratie*, Stuttgart(Dietz) 1899.1920. 佐瀬昌盛訳『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』ダイヤモンド社、1974年。

Cassirer, Ernst: *Kants Leben und Lehre*, verlegt bei Bruno Cassirer, Berlin 1918.2. Aufl.1921. 門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、(1986年)2003年。

Cassirer, E.: *Philosophie der symbolischen Formen*, 1 Teil, *Die Sprache*, Berlin 1923.2 Teil, *Das mythische Denken*, Berlin 1925.3 Teil, *Phänomenologie der Erkenntnis*, Berlin 1929. 生松敬三・木田元訳『シンボル形式の哲学』(一) 岩波文庫、岩波書店、1989年。木田元訳『シンボル形式の哲学』(二) 1991年、木田元・村岡晋一訳『シンボル形式の哲学』(三) 1994年。木田元訳『シンボル形式の哲学』(四) 1997年。

Cohen, Hermann: *Lojik der reinen Erkenntnis*, 1871. in: *Cohen Werke*, Hrsg.von Hermann-Cohen-Archiv, Bd.1, Georg Olms Verlag, Hildesheim, New York 1977. 村上寛逸譯『純粋認識の論理学』ヘルマン・コーエン哲學の體系第一巻、第一書房、1932年。

Copernicus, Niclaus: *De revolutionibus orbium coelestium*, LibriVI, Normbergae apud Ioh. Petreium, 1543. Hacisimile-reprint by Culture et Civilisation, Bruxelles, 1966.

Descartes, René: *Discours de la méthode, Essais*, 1637. Préface et commentaires par Marcel Barjonet.(Classiques du peuple). Paris, Editions Sociales, 1950. 谷川多佳子訳『方法序説』岩波文庫、岩波書店、1997年。

Descartes. R.: *Medtationes de prima philosophia,* 1641. Oeuvres de Descartes, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Paris 1965-1975. 井上庄七・森啓訳「省察」デカルト『省察　情念論』所収、中公クラシックスW21、中央公論新社、2002年。

Fichte, Johann Gottlieb: *Die Anweisung zum seligen Leben, oder auch die Religionslehre*, Jena und Leipzig, Gabler 1806. in: *Fichtes Werke*, Hrsg. von Immanuel Hermann Fichte, Bd.3, Berlin 1965. 高橋亘訳『浄福なる生への指標』岩波文庫、岩波書店、1938年。

Galilei, Galileo: *Discorsi e dimostrazioni matematiche introno a due nuove scienze attementi alla mecanicu & i movimenti locali*. In Leida, Appresso gli Elsevirii, 1638. 今野武雄・日田節次訳『新科学対話』2巻、岩波文庫、岩波書店、1967年。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

ガウゼ、フリッツ・竹内昭訳『カントとケーニヒスベルク』梓出版社、1984年。

浜田義文編『カント読本』法政大学出版局、1989年。

林達夫他監修『哲学事典』平凡社、(1971年)1979年。

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich: *Wissenschaft der Lojik*, Bd.1, die objektive Logik, 1812/1813. in: *Gesammelte Werke*, Bd.11, Hrsg. von Friedrich Hogemann und Walter Jaeschke, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1978.

Hegel, G.W.F.: *Wissenschaft der Lojik*, Bd.2, die subjektive Lojik, 1816. in: *Gesammelte Werke*, Bd.12, Hrsg.von Friedrich Hogemann und Walter Jaeschke, Felix Meiner Verlag,Hamburg 1981. 寺沢恒信訳『大論理学』1.2.3巻、以文社、1977, 83, 99年。

Heidegger, Martin: *Kant und das Problem der Metaphisik*. Todtnauberg 1929.3Bd.,1965. 木場深定訳『カントと形而上学の問題』〔ハイデッガー選集19〕理想社、1976年。

廣松渉他編集『岩波　哲学・思想事典』岩波書店、(1998年)2003年。

Hume, David: *A Treatise of Human Nature*, 1739-40. Reprinted from the original edition.Edited by L.A.Selby-Bigge. Oxford. Clarendon Press, 1888. second edition 1896. 大槻春彦訳『人性論』4巻、岩波文庫、岩波書店、1948-52年。

岩崎武雄『カント「純粋理性批判」の研究』勁草書房、1965年。

Kant, Immanuel: *Kritik der reinen Vernunft*. 1781. in: *Kants Werke*, Hrsg. von Ernst Cassierer, Bd.3, Berlin 1922.

Kant.I.: *Kritik der reinen Vernunft*. 1.Aufl.1781.2.Aufl.1787. in: *Philosophie Bibliothek*, Bd.37a, Hrsg. von Raymund Schmidt, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1956. 篠原英雄訳『純粋理性批判』上中下巻、岩波文庫、岩波書店、1961, 62年。

Kant, I.: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788. in: *Kants Werke*, Hrsg. von E.Cassierer, Bd.5, Berkin 1922.（C版)。

Kant, I.: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788. in: *Philosophie Bibliothek*, Bd.38, Hrsg. von Karl Vorländer, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1958.（B版)。深作守文訳「実践理性批判」『カント全集』第七巻所収、理想社、(1965年)1974年。波多野精一・宮本和吉・篠田英雄訳、カント『実践理性批判』岩波文庫、岩波書店、(1979年)2003年。

Kant, I.: *Lojik*, 1800. in: *Kant Werke*, Hrsg. von Ernst Cassierer, Bd.9, Berlin 1923. 門脇卓爾訳「論理学・緒論」『カント全集』第12巻所収、理想社、1975年。湯浅正彦・井上義彦訳「論理学」『カント全集」第17巻所収、岩波書店、2003年。

Kant, I.: *Anthoropologie in pragmatischer Hinsicht*, 1798. in: *Kants Werke*, Hrsg. von E.Cassierer, Bd.8, Berlin 1923.（C版)。

Kant, I.: *Anthoropologie in pragmatischer Hinsicht*, 1798. in: *Philosophie Bibliothek*, Bd.44, Hrsg.von Karl Vorländer, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1980.（B版)。山下太郎訳「人間学」『カント全集』第14巻所収、理想社、1966年。渋谷治美訳「実用的見地における人間学」『カント全集』第15巻所収、岩波書店、2003年。

カント、イマヌエル・宇都宮芳明監訳『純粋理性批判』上下、以文社、2004年。

Kaulbach, Friedrich: *Philosophie als Wissenschaft*, Eine Anteilung zum Studium von Kants Kritik der reinen Vernunft in Vorlesungen, Gerstenberg Verlag, Hildesheim 1981. 井上昌計訳・F．カウルバッハ『純粋理性批判案内－学としての哲学－』成文堂、1984年。

北岡武司『カントと形而上学－物自体と自由をめぐって－』世界思想社、2001年。

高坂正顕『カント』西洋哲学叢書、1939年、『高坂正顕著作集』第二巻所収、理想社、1954年。

古林喜楽『ドイツ経営経済学』千倉書房、1980年。

小島三郎『ドイツ経験主義経営経済学の研究』有斐閣、1965年。

小島三郎『戦後ドイツ経営経済学の展開』慶應通信、1968年。

黒崎政男『カント『純粋理性批判』入門』講談社選書メチエ192、講談社、2000年。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

黒積俊夫『ドイツ観念論との対決ーカント擁護のためにー』九州大学出版会、2003年。

桑木厳翼『カントと現代の哲学』岩波書店、(1917年)1948年。

Lask, Emil: *Rechtsphilosophie*, 1905. 田中耕太郎訳『法律哲学』田中耕太郎法律哲学論集（二）岩波書店、1945年。

Lindwurm, Arnold: *Grundzüge der Staats- und Privatwirtschaftslehre*, Braunschweig 1866.

牧野英二『カント純粋理性批判の研究』法政大学出版局、(1989年)1993年。

牧野英二・中島義道・大橋容一郎編『カントー現代哲学としての批判哲学』状況出版、1994年。

Menger, Carl: *Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der poitischen Ökonomie insbesondere*, Leipzig 1883. 福井孝治・吉田昇三訳『社会科学の方法に関する研究』岩波書店、(1939年)1988年。

森哲彦『ドイツ経営経済学』千倉書房、2003年。

長尾伸一『トマス・リード』名古屋大学出版会、2004年。

中島義道『カントの時間構成の理論』理想哲学選書、理想社、1987年。

中村常次郎『ドイツ経営経済学』森山書店、1982年。

Newton, Sir Isaac: *Philosophiae nationalis principia mathematica*, 1687. Vol. I－II, The 3 dedition(1726)with variant readings. Assembled and edited by Alexandre Koyre and I.Bernard Cohen, with the assistance of Anne Whitmann, Cambrige, University Press, 1972. 中野猿人訳『プリンシピア　自然哲学の数学的原理』講談社、1977年。

大江精三『一般認識論　科学的形而上学への道』南窓社、1973年。

Reid, Thomas: *An Inquiry into the Human Mind on the Principles of Common Sense*. Edinburgh, Printed for A. Miller and A.Kincaid & J.Bell, 1764.

Rickert, Heinrich: *Der Gegenstand der Erkenntnis, Einführung in die Transzendental-Philosophie*, Verlag Mohr, Tübingen 1892.3.Aufl.1915. 山内得立訳『認識の対象』岩波文庫、岩波書店、(1927年)1988年。

Rickert, H.: *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, Verlag Mohr,Tübingen 1899. 2.Aufl.1910. 佐竹哲雄・豊川昇訳『文化科学と自然科学』岩波文庫、岩波書店、(1939年)1967年。

坂部恵『カント』講談社学術文庫1515、2001年。

坂本百大「科学哲学とは何か」坂本百大・野家啓一編著『科学哲学ー現代哲学の転回』所収第１章、北樹出版、2002年。

Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph von:*System des transzendentalen Idealismus*, 1800. in: *Philosophische Bibliothek*, Bd.254, Hrsg. von Ruth-Eva Schulz, Felix Meiner, Hamburg 1957. unveränderter Nachdurch 1962. 赤松元通訳『先験的観念論の体系』蒼樹社、1948年。

Schönpflug, Fritz: *Das Methodenproblem in der Einzelwirtschaftslehre*, Eine dogmenkritische Untersuchung, C.P.Poeschel Verlag, l. Aufl. Stuttgart 1933.,2 erw. Aufl. Hrsg. von Seischab, Hans: *Betriebswirtschaftslehre*. Methoden und Hauptströmungen, Stuttgart 1954.（第二版）古林喜楽監修・大橋昭一・奥田幸助訳『シェーンプルーク　経営経済学』有斐閣、1970年。

Simmel, Georg: *Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaften*, Dunker & Hunblot, Leipzig 1908. 居安正訳『社会学』上・下、白水社、1994年。

Smith, Normann Kenp: *A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason"* 1.Ed.1918.2.Ed. revised and enlarged, The Macmillan Press Ltd. 1923. 山本冬樹訳『カント『純粋理性批判』註解』上下、行路社、2001年。

Stammler, Rudolf: "Über die Methode der geschichtlichen Rechtstheorie", *Festgabe Bernhard Windscheids fünfzigjährigen Doktorjubiläum am 22. Dezember, 1888*, Halle a.S. 1889. jezt in: *Rechtsphilosophische Abhandlungen und Vorträge*, Bd.1, Berlin 1925.

高峯一愚『純粋理性批判入門』論創社、1979年。

ヴァイス、ノルベルト・藤川芳朗訳『カントへの旅ーその哲学とケーニヒスベルクの現在ー』同学社、1997

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

年。

Weber, Max: *Die "Objektivität" sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis*, 1904. in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre von Max Weber*, 1922. 富永健一・立野保夫訳・折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫、岩波書店、1989年。

Weyermann, Moritz Rudolf / Schönitz, Hans: *Grundlagen und Systematik einer wissenschaftlihen Privatwirtschaftslehre und Pflege an Universitäten und Fach-Hochschulen*, Karlsruhe 1912.

Wieser, Friedrich von: *Über den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Wertes*, 1884.

Windelband, Wilhelm: *Einleitung in die Philosophie*. in: *Grundriss der philosophischen Wissenschaften*, Hrsg.von Fritz Medicus, Tübingen 1914,2.Aufl.1920. 速水敬二・高桑純夫・山本光雄訳『哲学概論』1. 2巻、岩波文庫、岩波書店、1964年。

山崎庸佑編著『カント超越論哲学の再検討－あるいは最新版「哲学」案内－』北樹出版、1987年。

吉田和夫『ドイツ経営経済学』森山書店、1982年。

NII-Electronic Library Service